

# ふくやま歎異抄の会通信

令和三年四月

## 前序

竊かに愚案を回らして、粗古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑有ることを思うに、幸いに有縁の知識に依らずば、争でか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ること莫れ。仍って、故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留る所、聊さか之を註す。偏えに同心行者の不審を散ぜんが為なりけりと、云々



私の本当の願いは何なのか、それが知れたら：

寺岡一途

八月のある一日、子供たちをつれ、近くの島に海水浴に出かけた。民家に挟まれた小さな乗り場からフェリーで島に渡り、海岸に沿った狭い道をしばらく走る。あまり人のいない小さな砂浜を見つけ、そこで泳ぐことにする。テントを組み立て、荷物をおろす。水着に着替え、熱い白砂をふんで波打ち際に行き、水に入る。澄んだ水の底に小さな魚が泳いでいる。子ども達は沖合を船が通る度に打ち寄せてくる大きな波のうねりに歓声をあげる。そしてさらわれそうになるビーチボールを追って波に向かって走っては、また波に追われて帰ってくる。妻はテントの日陰で小さな子供をあやしている。白く霞んだ水平線の上に大きな船が二艘、じつと動かない。頭上には夏の青い空がどこまでも広がっている。

「私の本当の願いは何なのか、それが知れたら・・・」

そういう思いがふと心の中にあらわれては消えてゆく。

なぜそんなことを考えるのだろう。

そんなことを考え始めたのは何時のころからだろう。

私は幼い頃死を恐れた一時があった。小さい子供の心に何故、突然「死」という思いが侵入してきたのかわからないが、ある夕暮、家の前の坂道に立っていた私のところに死の恐怖が侵入してきた。「死ぬことが怖い、死にたくない」私の幼い心はその思いの持つ切実さ

に震えた。私は畑仕事から帰ってきた母にすがりついてその恐怖を訴えた。母は積尊の四門出遊の話をしてくださった。やがて母の温かい体温にふれて安心したのだろうか、私の恐怖は遠のいて行った。私は「大きくなったら科学者になって絶対に死なない薬をつくるよ」と母に誓った。と同時に「でも僕が大きくなってその薬が出来たとしても、その時、母さんはもうお婆さんになっているだろうなあ」そんな戸惑いのような思いも心に浮かんでいていた……。

成長するにつれ、私もいろいろの悩みに出会ったが、その悩みの中で私が願っていたものは何だったのだろうか。

私は「友がいない」ということについてかなり長い間悩んだ。私は小学生の頃、いつも一人で学校から歩いて帰っていた。小心であつた私はリーダーにもなれず、また人の後についてゆくのも嫌で、腕白グループの中には入れなかつた。五年生の時、担任の先生に大声を出す練習とかで、学校の裏山に全員登り、そこで山の上手と下手に別れ、好きな友達の名前を自由に呼びあうという課題を指示された時、私は誰の名前を呼ぼうか、私の順番がくるまで真剣に悩んだ。みんなの中で堂々と相手の名前を独占して呼べるほど親密なと思える友人は私には一人もいなかった。青年期に達するまであれほど深く私を悩ませた友人の不在とはいったい何であつたのか……

高校生の頃、私は「自意識」の存在に苦しんだ。たまたま進学校とよばれる学校に入学したが、その頃から私はいつも「私」のことしか考えられない状態になっていった。その自意識はヘルメットのように

私の頭蓋をすっぽりと包み込み、私は勉強に意識を集中することが全く出来なくなつた。私の成績は急激に落ちていった。

その当時買ったヤスパースの「哲学の学校」という本が今でも本棚に残っている。書いてあることは当時ほとんど理解できなかったのではないかと思う。しかし何故私とその本を手に取り買ったのか、その動機は今でも痛いようにわかる。私の魂が当時求めていたのは学校で与えられるいろいろな雑多な知識ではなくて、哲学が問題にする、「人間」、「生」、「死」、「愛」、そのような知識だったのだ。しかし私は受験勉強に、ただひたすら公式の暗記に努めていた。そして私の頭を覆う自意識の厚い殻は私を苦しめつづけた。この私を深く苦しめた自意識の殻とはいったい何だったのか。

大学生のとき三原の山奥にある禅宗のお寺に行き、しばらく座禅をしたことがある。私は禅の「悟り」と言われるものにあこがれたわけだが、決してひとすじにそれを求めたわけではない。「本当の青春とはこんなものではない、女性を愛し、友と海に行き山に行き、行動の中で流される汗の中にこそ青春はある。なのに自分は今このように一人ここに座っている、こんな青春は間違っているのではないのか……」そんな屈折した思いが一人夜の静寂の中で座る私の胸中を去来していた。しかし私はそれから二夏ぐらいそのお寺に通つた。

いろいろな思いにもかかわらず、何度も私をそこに引きつけたのはそこにあつた私の感性に直接的な形で入ってくる何ものかであつた。仏法は鬱蒼と繁る杉の太木に囲まれた清閑なお寺の空気と、深

い孤独の影をともなった老師の人柄への傾倒という形で私の中に入ってきた。老師は禅の師匠であったにもかかわらず、法話の中で必ず親鸞聖人について一言触れられた。私は結局ひとつの公案も透過することが出来なかったが、後に浄土真宗の教えに触れるようになった大きな縁はこの老師との出会いにあったような気がする。

幼い頃、突然、私の心の中に侵入してきた死に対する恐怖は、大學生活をおくっていた青春のただ中の私の心の中に再び侵入してきた。二十一才、死の恐怖、そして絶望的な孤独。一冬の間、私はそれらのものと共に過ごした。一度死んでしまったならば、私という自己意識はたとえ幾億年、幾光年、いや無限の時の経過があろうとも、けっしてもう存在することはない、その虚無の切実に私の心はガタガタと震えていた。

その冬の夕方、大学からの帰り道、橋の上から大田川の暗い水面を見つめていたとき、人生において人が本当に目標にできるものは「美を追求すること」と「他者と心をふれあうこと」この二つしかない、という思いが心をよぎっていった。私はその与えられた断言を反芻しながら、水面にゆれるネオンの光をじつと見つめていた。その時の私の心をひたしていた暗い虚無の闇の深さと、否みような確信をともなったこの断言の輝きの対照が、今でも忘れられない。その冬があげて私は進路を変更した。しかし私が絵を描くことを決意するまでには長い迷いの時があった。私に人並以上の才能がないことはよくわかっていたし、またいろいろな条件がその決意をとどめようとした。私は絵を描くことを要求する私の「内なるうなが

し」に対して幾度も幾度も「そんなことはできない」と言った。しかし私が私自身に対して「否」と言う度に、私の前から未来がスッポリと消え、私は堪え難い精神的な空虚さ、怠惰さの中に陥っていった。その空虚さを満たすものは何もなかった。どんな気晴らしも私の心を満たさなかった。「人はパンのみにて生きるにあらず」という聖書の言葉は、その苦悩の中で何のただし書きも付けず真実を告げていた。

「かれはなぜ自分が不幸であり、倦怠し、疲労し、流れ漂うものであるかを知っている。それはかれが自己の目的を認め定めたいうえで、自己の全存在をあげてそれを追求することをしないからである」わたしはこのヘッセの言葉を深い共感をこめて日記に書き写した。

何度かの「否」の後、私は私の中の「絵を描け」といううながしに同意したが、そこに深い安らぎがあった。私は絵を描きはじめて。「人間にとって意味があるのはその結果ではなく、理想を求めるその志にある」私は当時自分自身に対してよくそういう意味のことをつぶやいていた。私が絵を描くことを選んだのは絵を描くことに対する自信からではなく、美しいものにたいする憧れと、絵を描くこと自体の中に内在する喜びのものからであった。

「いのち」と創造性、それは切り離すことのできない連関をもつものであることを私はその時から感じていた。いのちの本質はその創造的な活動性そのものにある、それゆえにいのちの創造性を生きるとき、人は深い充実感をもつ。反対にいのちの流れが阻まれ、淀む

とき、人は虚無の上に漂う「意識」の迷路におちこんでゆく。私は絵を描くことを通して私の「意識」ではなく、私の「いのち」が生きることを願ったのだ。

あの夕方の直観「美を追求すること」、それを注解してくれたのはシモーヌ・ヴェイユの次の言葉だった。

「美はそれ自体のうちにどんな目標も含んでいないものであるから、この地上において、ただ一つの究極的なものとなる。つまり地上には目標などというものは少しもないのである。わたしたちが目標だと思っているものもすべて手段にしかすぎない。これは明らかに真理である。」

深い孤独の調音、それは青春の私と共に常にあつた。九州で夕暮の暗い林の中を歩いていたとき、ふと、誰も住んでいない星にひとりおき去りにされたような深い孤独感に襲われたことがある。暗い木立はまるで異星の風景のように私を取り囲み、物言わぬ木々に日頃感じたことのない生命の存在を感じた。そうしてそれらの木々と心が通じぬことが私の孤独の意識をさらにつのらせた。その孤独は「一人ぼっち」という孤立感でなく、もっと根源的な、言うならば宇宙と一人対峙した自意識の究極的な孤独感とも言うようなものであつた。当時、私はその孤独を「絶望的な孤独感」と表現していた。誰ひとりこの自意識の牢獄から出ることは出来ないだろう、そして一人で死んで行かねばならない、私の中にはそういう思いがあつた。「愛」とはこの絶対的な孤独に対応する何ものかではなくてはならなかつた。自己という明晰な意識を失うことなく、その意識と一体

なものと感じられる他者の意識に出会い結ばれること、それが私が青春のただ中で求めた愛のかたちであつた。しかしその研ぎ澄まされた自意識と自意識の結合を求める願ひには、有限と有限を繋ぎ合わせて無限をつくろうとするような無理が存在している。それ故にその愛に躓いたとき、私はさらに深い孤独の中に陥つた。私は何に絶望していたのだろうか。私がその愛の中で求めていたものは、自己意識の牢獄を共有することによる救いであり、私を絶望の中に追いやつたものは、その相手を失い、自己意識の牢獄に閉じ込められたまま、ただ一人虚無の中に消えてゆかねばならないという嘆きではなかつたか。私にその愛にうながしたのは私の孤独であり、私を絶望せしめたのもその孤独な自意識の宿命であつた。

深い孤独と死への恐怖、それは共に自己意識の有限性への自覚と切り離せない。しかし自己の有限性におののく時、そこにはすでに無限性への憧れ、かぎりなきいのちへの憧憬あこがれが存在しているのではないか。人はその時大きな課題を自己の背に荷なうのである。それは解かれねばならぬ問いとしてその人の生涯に付き添いつづける。青春は、少なくとも精神的存在としての人間の青春は、自己の有限性にめざめた、あるいは無意識のうちにそれに突き動かされる魂の震えとともに始まる。青春における孤独と愛に対する憧れは永遠性を求める旅立ちの合図であろう。いや「人の中に内在するいのちが、永遠のいのちに出会うために旅立つときである」と言ってもいい。それは様々な形をとって人を揺り動かし、求めしめ、さすらわせる。

「人とこのころをふれ合うこと」、あの夜、私の胸に去来したこのもう一つの確信は私の歩むべき方向をかすかに指し示す。それが人生の究極的な生き甲斐になりうるのは、そこに「いのち」と「いのち」が触れ合う形があるからではあるまいか。それは愛という名において他者を自分の中に所有しようとするのではなく、限りない謙虚さの中で魂が外界にふれる瞬間である。

「愛、それは他者の存在をそのままに受け入れ、それを生かそうとするもの、他者を自己の意欲に従わしめようとしてこれを破壊しないことである」、いのちといのちが裸形にされてふれ合う、その時、人はただその事実の存在のみに基づく生命の充実をうる。それはなんら未来の結果を、現在の条件を求めない、ただ現在から現在の中を無限にさすらいつつ、そのふれ合いの中に自足しうる。深い謙虚さにおいてところがふれ合うとき、そこには無限なるいのちが影現し、息づいているのではないか。

九州で私が青春時代の最後を過ごした夏、玄海灘に面した海辺の家で子供たちを集めての仏教の会があった。その時、一つの感動が私を貫いた。

その日、夕方の勤行が海辺で行われた。私たちは薄暗くなりはじめた海岸に横に並んで「阿弥陀ほとけをおがまん．．．」と『十二礼』を唱和した。太陽は西の空と海を茜色に染めて沈もうとしていた。夕陽の光線が参加した子供たち、青年、大人、老人を一樣に赤く染めていた。全員が沈んで行く赤い夕陽をじつと見つめていた。誰ひとり言葉を発する者はいなかった。海から吹いてくる快い風の中

で「いのち」の歌が歌われた。歌が終わり、太陽が水平線の下に落ちても、みんなじつと停んで動こうとしなかった。ただくり返し寄せる単調な波の音が夕闇の中に響いていた。

その時、静かな感動が私のところを浸していた。しかし同時に私の意識は「なぜこんな芝居じみた勤行をするのだろう、あの西の空の向こうに浄土があるわけでもないのに．．．」とも自問していた。その自問は私の「意識」が私を浸していた「感動」が何なのか理解できなかったが故に、そういう問いの形で私に感動の意味を問いかけていたのだろう。勤行が終わったあと私は一人になってその感動の意味するものについて考えた。

あの感動は小さな子供から大人までが、共に沈んでゆく夕陽を見つめながらじつと佇んでいた、その事実の中から生まれていた。もし私がひとりで見つめていたならば、もしみんなが向かい会って立っていたなら、また見つめていたのが朝日であったなら、その感動は生まれていなかったらう。西の空を茜色に染めて沈んでゆく荘厳な夕陽は、見つめる人の心をかぎりなく内に向ける。あの時、子供も大人も夕陽を見つめながら、そのままの姿で深く自分の内側を見つめていたのだろう。いや見つめていたというより、ひとりひとりが内に内にと限りなく呼ばれていたのではないか。

あの時、私はそれらの人々に共に歩む者としての深い連帯を感じた。優越感も、劣等感も、競争心もなく、ただひたすら共に手を取り歩んで行きたい、共に呼ばれる者として歩んで行きたい、そして幸福になりたい、そういう連帯を感じていた。そうして、その連帯感の中に私の心を深く満たすものを感じていた。その思いは決して私

の自己意識に起源をもつものではなかった。それまでに私はそのような親密な連帯を他の人々に感じたことはなかった。

またその会で講師の先生のお話を聞きながら、私は私の不誠実さをつよく感じていた。その不誠実さの思いは私の一つ一つの行動の反省からきたのではなく、自己を対象化して見つめる自意識そのものの本質に根差すものであったように思う。それゆえ私は『真実』の前に深く頭を下げたいと願った。自意識がそれ自身の宿命を全うする道はそこにしかないことを私はその時予感していたように思う。

いつの間にか私は三十の半ばを越え、結婚し、絵を描くこともほとんど止めてしまった。死にたいする恐怖、絶望的な孤独感、美にたいする渴望、それらのものはどこに行ってしまったのか。ささやかな日常の出来事に振り回されながら、一日一日を過ごしている。そんな中で、ふと、私のところをよぎる「私の本当の願いは何なのか、それが知れたら・・・」という思いは、私が青春のただ中で負わされた課題がまだ解かれていない、そのことにたいするいのちの催促なのだろう。

私にはわかる、私の心が深く願っているのは、自己意識の牢獄から出て「おおいなるいのち」と出あい、そのいのちとともに生きることである、ということが。それ故にそのものに深く出あい、その中で安らぐことが出来るまで私の心は決して「私の願いは何なのか、それが知れたら・・・」というつぶやきを止めないだろう。

明るい砂浜にくり返し寄せる波。波とたわむれ歓声をあげる子供たち。遠い水平線の上に二そうの貨物船がじつと動かない。白い入道雲の立つ限りなく遠い夏の青い空。

まだ幼い子供たちよ

いのちそのものを生きているお前たち

お前たちのその明るさ、その無邪気さ

その飽くことをしらない活動性

しかしやがてお前たちもそのいのちを見失い

さすらう日がくるだろう

そうしてお前たちの青春において

それぞれの形で出発をするだろう

耳かたむけよ

深き内なる願いに

耳を澄ませよ

さらに深く

一切のものを召喚したもう

おおいなるいのちのねがい

耳かたむけよ

(一九八六年?八月二十九日)

## 一つの終わり

―福山歎異抄の会の歴史

この三月三十日、会に来てくださった方々に「今月をもってこの会を閉じます」とお伝えした。そのことを決めたのは前夜のことだった。

この会を立ち上げたのは年号が昭和から平成に変わった一九八九年四月だった。その時から今月でちょうどまる三十年の歳月がたつ。平成はあと一月で終わる。私は六十八才になっていた。

三十代の終わり、仕事にすこし余裕ができたころ、月例の聞法会を立ち上げたいと思い、細川巖先生に講師をお願いしたところ、先生は断られ、講師として松田正典先生を紹介してくださいました。細川先生は会座の講師を引き受ける時は何年かののスパンで引き受けられていたようである。だから自分の歳と体力からそれは無理と考えられたのだろう。先生はその頃、多くあつた各地の会座を少しづつ整理縮小されていた。

第一回の「歎異抄の会」を駅裏にあつた社会福祉会館で開催したところ、遠近より四十名近くの方が聞法に来て下さった。その後、会場を何ヶ所か変わりながらも先生に毎月来ていただいた。三年がたつた一九九二年(平成四年)四月、細川先生を講師にお願いして三周年の記念の会を寺町の道証寺で開催した。後にその時の講義を下敷きにして『晩年の親鸞』が出版された。

細川先生は一九九六年(平成八年)一月一日になくなられた。十年がたち、松田先生が諸般の事情により講師を辞退されることになった。先生のお勧めもあり、その後を継いで、私が講師となり会を継続することになった。私としては来られる方が誰もいなくなつたら、その時点で会を閉じようと思つていた。

一九九九年(平成十一年)、四月、私が講師となり、新しい第一回の会を社会福祉会館で行つた。参加者は減つたが、それでも引き続きいてたくさんの方が来てくださった。それから後、仕事をしながら案内を出し、通信を作り、会を続けた。松岡五作先生、竹下陶子先生、福山支部の方、その他、多くの方が陰に陽に会を支えてくださった。母が亡くなつたのは平成十八年春であつた。ときおり新聞の会座案内を見て来られる方もあつたが、参加者の数が大きく増えることはなかった。

会では私は毎回「仏教とはどういう教えか」というあたりから話に入ることが多かつた。私は仏教と自分とのかかわりを確認しないことには歎異抄の内容に入つていけなかつた。なぜなら会が始まる直前まで、私の意識は世間道にどっぷりと浸かつていたからである。つまりところ二十年間、私が会で話したことは毎回、「仏教とは何か」という自問自答のくり返しであつたのだろう。私は「阿弥陀仏」「本願」「念仏」「浄土」などの言葉を自分の言葉として語る事ができなかった。

時おり、そんな私が講師として仏法を語る意味があるのだろうかと自問することもあつたが、そんな時には、私の話を聞いてくださればその人は他の方のお話がよくわかるようになるのではないかと自答していた。

二〇〇九年(平成二十一年)一月、長く会を支えて下さつていた松岡五作先生が亡くなられた。四月、私は学校を早期退職した。

やがて、長年聞きに来て下さつていた方の姿が、一人また一人と会場に見られなくなつていった。しかし、人数は減つても、一人でも来てくださる方がある以上、積極的に会を閉じる理由もみつからず、会の日程が近づくと私は机に向い仏書を開き、会で話すためのメモを作つた。

参加される方はみなお歳をとり、自力では来れない方もいた。じつと聞いてくださっていた方に、ある時感想をお聞きすると、耳が遠くなり、ほとんど先生の話は聞こえないのですが・・・と答えられ、愕然としたこともある。酸素ボンベを自分で引いてタクシーで聞きにこられた方もある。私はそのような方に不十分なお話しかできないうちに次第にいたたまれなくなつた。私の話をいくら聞いても信心念仏にはならない、私自身に信がないのだから・・・。たとえ信というものが如来よりたまわるものであるにしてもである。

そのような中で、ふと、この「歎異抄の会」は私自身のために存在していただけないだろうか、聞きに来ておられた方は、私にお念仏の世界を届けるために、それまではなんとしてもこの会を続けてあげようと、ただそのことのために身を運んでくださっていたのではないだろうか・・・と思うようになった。たしかに、もし三十年前、この会を立ち上げることがなかつたら、私はおそらくこのように毎月、仏書を読み、お念仏とは何かと自問自答することはなかつたらう。この会があつたために、私はこの三十年間、毎月一度は必ず仏法の世界にひきもどされた。

三月の会の前夜、そのことに思い到つた時、私は明日で会を終了しようと思つた。私の中にかすかに見えてきたものもあつた。それによつてお聖教を自分なりに読めるようになつてきた。もうこれ以上、これらの方をこの会につなぎとめては申しわけないと思つた。迷いはなかつた。

最後の会では、『歎異抄の会』の歴史をふり返りながら、今、私に少し見えてきた歎異抄の風景についてお話しした。

「つまるるところ『こんな自分ではいけない』という思い、いわゆる『自力のはからい』が問題であるということがやつと見えてきた、そこが私の現在の立ち位置である。しかし、そのことに気がつくまで

に五十年という時間がかかつた。私の業の深さを思わざるえない。『これではいけない』というはからいが思ひの底にあるかぎり、『ただ念仏申せ』のおおせは聞こえない。また『ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし』と人に勧めることもできない」と。

会に来てくださったお一人お一人にお礼をいい、出来たばかりの細川巖先生のご本をさしあげた。全員が退室された後、椅子に座つてしばらく講義室横の総ガラスばりの窓外の景色を見ていた。庭の木立の下には、今日も小さな石のお地藏様がすわつてこちらをじつと見守つてくださっていた。その仏さまにお礼をいって部屋を出た。

次の日の朝、散歩にでると開花が遅れていた村の川沿いの桜の蕾も、下の方から開きはじめていた。昼前、新しい年号が発表された。「平成」から「令和」へ、一つの終わりは一つの始まりなのだ・・・。

(二〇一九年三月記)

#### 【後記】

三月をもつてNHKの講座が閉鎖になりましたので、引き続き文学館で会を再開することにしました。「終わり」が「はじまり」へと続いてゆく法界の無窮の歴史の不思議を思います。

「・・・連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがための故なり」『教行信証』

月二回の開催を予定していますが、お忙しい方は一回だけの参加でもかまいませんので、時間をみつけ、どうぞおこしください。

ご一緒に本願の世界をたずねてゆきましょう。  
次回は四月二十七日(水)を予定しています。